

嘘をつくときの内的過程に関する予備的検討¹⁾

佐藤 拓*・太幡 直也**

本稿では、欺瞞時の内的過程について基礎的な枠組みを提唱した Zuckerman et al. (1981) の多要因理論 (Multi-Factor Theory) と、欺瞞の認知的側面を理論化した Walczyk et al. (2014) の ADCA 理論 (Activation-Decision-Construction-Action Theory) について概説した上で、嘘をつく人が認識している内的過程と各理論の対応について検討した。日常生活で嘘をつくときに経験した内的過程に関する自由記述を分析したところ、内的過程として感情反応が言及されることが多く、認知的負荷や認知的努力などの認知処理について言及されることは少なかった。一方、認知的負荷に影響しうる意思決定にかかわる思考内容 (嘘の効用・必要性、嘘の露見の悪影響、嘘の露見の可能性) は言及されることが多かった。また、非言語行動と言語行動に対する統制の試みが言及される頻度は同程度であった。以上の結果を各理論と対応させて考察した。

キーワード：嘘、欺瞞、内的過程

人はいつも正直に行動しているわけではなく、ときには不正直な行為により他者を騙すことがある。このような意図的に他者を騙す行為は、「嘘をつく (lying)」, または欺瞞 (deception) と呼ばれる。欺瞞の定義は研究者によって異なるが、Masip et al. (2014) は先行研究で用いられた定義をまとめ、欺瞞を「成功するか否かに関わらず、言語的または非言語的手段によって、事実または感情に関する情報を隠したり、偽ったり、何らか他の方法で操作して、話者が誤りだとみなす信念を他者に形成し、維持するための意図的試み」(p. 148) と定義している。一方、嘘は、「真実ではない情報を述べることで相手を騙す欺瞞のサブタイプ」であり (Levine, 2014, p. 3), 言語的なものに限定される (Carson, 2022; Hopper & Bell, 1984; 村井, 2000)。このように、嘘と欺瞞は厳密には異なるものであるが、先行研究 (e.g., Vrij, 2008 太幡他監訳 2016) と同様に、ここでは欺瞞と嘘をつく行為を互換性のあることばとして用いて議論を進める。

本稿では、欺瞞時の内的過程について基礎的な枠組みを提唱した Zuckerman et al. (1981) の多要因理論 (Multi-Factor Theory) と、認知的側面を綿密に理論化した Walczyk et al. (2014) の ADCA 理論 (Activation-Decision-Construction-Action Theory) を概説する。その上で、大学生が日常生活で嘘をつい

たときに経験した内的過程に関する記述をまとめ、嘘をつく人が認識している内的過程と各理論との対応について検討する。

嘘をつくときの内的過程

嘘をつく行為、または欺瞞行為を実行しようとする、行為者の認知や感情といった内的過程に変化が生じることがある。このときの内的過程の変動は、嘘をつくか否かの意思決定、嘘をつくときに用いる方略、さらには欺瞞の手がかりとなる行動表出に影響する。そのため、嘘をつくときの内的過程を把握することは、嘘をつくという行為全般の理解のために重要だと考えられる。以下では、欺瞞時の内的過程についての理論である多要因理論 (Zuckerman et al., 1981) と、欺瞞の認知的側面を綿密に理論化した ADCA 理論 (Walczyk et al., 2014) について概説する。

多要因理論 Zuckerman et al. (1981) は、欺瞞が嘘をつく人の内的過程、および行動表出に与える影響を理論化した。多理論によれば、欺瞞は特定の行動表出と直接に関連するものではなく、行動表出に影響を与える 4 つの内的過程 (または要因) である感情反応、覚醒、認知処理、行動統制の試みと関連するとされる。第 1 に、欺瞞によって嘘をつく人に感情反応が生じる可能性がある。嘘をつくことによって、人は罪悪感

* 明星大学心理学部

** 愛知学院大学総合政策学部

¹⁾ 本研究は 2022 年度明星大学若手研究費の助成を受けたものです。

を経験し、その嘘が露見することに不安を感じることがある。また、欺瞞は不快感情だけではなく、快感情を喚起することがある。Ekman (1985 工藤 訳編 1992) によると、嘘をつく人は騙す喜び (duping delight) と呼ばれる、他者を騙すときに感じる喜び、興奮、達成感、だます相手に対する軽蔑感などの快感情を経験することがある。第2に、欺瞞によって覚醒が高まる可能性がある。Zuckerman et al. (1981) は、欺瞞と自律神経系指標に関する研究から、欺瞞によって嘘をつく人の生理的な覚醒が高まることを主張した。第3に、欺瞞によって認知処理が亢進する可能性がある。嘘をつく人は、論理的な整合性があり、聞き手の既存知識とも矛盾しないように話を構成しなければならないため、嘘の詳細を作り出すことは真実を話すこともよりも困難な課題になる (Zuckerman et al., 1981)。また、嘘をつく人は、再び話すときに話が一贯するように、誰にどのような内容を話したかを覚えておく必要がある (Vrij, 2008 太幡他監訳 2016)。第4に、嘘をつくときに、人は自分の言語・非言語行動を統制することを試みる可能性がある。その際、他者に不誠実な印象を与えられと思われる行動を表出することを避け、その代わりに本当らしい行動を表出しようとする (Vrij, 2008 太幡他監訳 2016)。ただし、人はすべての行動を適切に統制することはできないため、過剰統制により不自然さが生じたり、言語的に表出される情報と非言語的に表出する情報に齟齬が生じることもある (Zuckerman et al., 1981)。

多要因理論の妥当性の検証は、実験研究と調査研究の両方から行われている。参加者の自己報告から嘘をつくときの内的過程を検討した実験研究では、嘘をつくときは真実を話すときに比べて内的過程を強く経験することが示されている (Caso et al., 2005; 佐藤, 2010, 2021; Vrij et al., 1996)。日記法を用いた調査研究 (Vrij, Ennis et al., 2010) でも、真実を話す場合に比べると感情反応や認知処理が亢進することが示唆されている。また、メタ分析によって、認知制御にかかわる事象関連電位であるN2と内側前頭陰性電位が欺瞞と関連することも示されている (Sai et al., 2023)。

多要因理論では、4つの内的過程が欺瞞と手がかりとなる行動をつなぐ媒介変数となることが想定されている (Levine, 2019)。しかしながら、欺瞞による内的過程の変化と行動表出の関連は単純ではない。4つの内的過程の変化は、それぞれが相反する外的な行動変化を引き出す可能性がある (Sporer & Schwandt, 2006, 2007; Vrij, 2008 太幡他監訳 2016)。たとえば、罪

悪感、不安、認知的負荷によって視線回避が促進されたとしても、人は視線回避を嘘と関連のある行動だと考えるため、行動統制により視線回避を抑制するかもしれない。実際、DePaulo et al. (2003) のメタ分析からは、欺瞞と各内的過程から予測された行動の関連は弱く、真実と嘘を判別可能な単一の行動の手がかりは存在しないことが示唆されている。さらに、欺瞞が高い認知的負荷を生じさせるという前提に対して批判がなされている (McCornack, 1997; McCornack et al., 2014)。日記法を用いた研究 (DePaulo et al., 1996; Vrij, Ennis et al., 2010) においても、日常生活でつく嘘によって生じる緊張や認知的負荷の程度は、概して高いものではないことが指摘されている。

以上のことから、嘘をつく人が真実を話す人よりもそれぞれの内的過程を強く経験し、それが行動表出にあらわれるというモデルは修正される必要があった。そして、嘘をつく人に見られる行動表出に関するさまざまな理論が提出されてきた。たとえば、嘘をつく人と真実を話す人の類似性や戦略的な行動統制を重視した自己呈示理論 (DePaulo, 1992; DePaulo et al., 2003)、だます相手との相互作用を強調した対人欺瞞理論 (Buller & Burgoon, 1996)、日常生活でみられる欺瞞的コミュニケーションを想定し、会話の協調原理 (Grice, 1989) に基づいた情報操作理論 (McCornack, 1992)、言語学、認知神経科学、発話算出、人工知能に関する知見に基づき、情報操作理論を改訂した情報操作理論2 (McCornack et al., 2014) が挙げられる。

以上に挙げた、嘘をつく人にみられる行動表出に関するさまざまな理論のほかに、Zuckerman et al. (1981) と同様、内的過程に着目した理論として、深刻な嘘の認知的側面について詳細をまとめたADCA理論 (Walczyk et al., 2014) が挙げられる。次項では、ADCA理論について概説する。

ADCA理論 Walczyk et al. (2014) は、複数の先行研究 (Lane & Wegner, 1995; McCornack et al., 2014; Sporer & Schwandt, 2006, 2007; Vrij, Granhag, & Poter, 2010; Walczyk et al., 2003; Zuckerman et al., 1981) に基づき、真実を話すことが求められたときにみられる嘘の認知的側面を説明する理論をまとめた。ADCA理論では、ワーキングメモリの中央実行系と長期記憶が関与する4つのコンポーネントが仮定されている。1つ目は活性コンポーネントであり、嘘をつく人も真実を話す人も、心の理論によって嘘をつく相手が追求する真実が何かを推論し、可能な場合は、その真実について意味的記憶、エピソード記憶、感情的記憶を長期記

憶から検索する。2つ目は決定コンポーネントであり、真実を話した場合と嘘をついた場合の相手の反応（効用）と、それぞれの反応が起こる確率が心の理論によって推測される。そして、真実を話したときの効用の期待値と嘘をついたときの効用の期待値を比較し、嘘をつくときの期待値が高い場合は嘘が選択されやすくなる。この期待値の差異は、嘘をつくことへの動機づけとなり、動機づけの程度に応じて認知資源が投入されることになる。また、同様の内容について過去に嘘をつくか否かを決定していない場合や、複雑で熟知していない社会的文脈に置かれている場合は、認知的負荷が高まると仮定されている。3つ目は構成コンポーネントであり、心の理論を働かせ、過去の経験に基づき、嘘をつく相手が何を知っていて、何を疑い、何を信じるかを推論した上で、偽装、曖昧化、省略、誇張など、目的を達成するために情報をどのように操作するかが決定される。その際、まず、事実または過去に経験した出来事の記憶を改変することが試みられる。それが難しい場合は、その社会的状況で典型的なスキーマやスクリプトが嘘を構成する際に利用される。それも難しい場合は、長期記憶と環境から活性化した種々の情報にもとづき嘘が構成されるが、高い認知的負荷が生じることになる。一方、すでに嘘を準備している場合は、その記憶を長期記憶から想起し、調整するだけで済むため、認知的負荷は低くなる。4つ目は実行コンポーネントであり、嘘をつく人が相手に嘘を伝達する段階である。嘘をつく人は自分の行動を統制し、自分の行動と相手の行動をモニタリングする（Buller & Burgoon, 1996; Vrij, 2008 太幡他監訳 2016）。また、真実を抑制し、嘘を活性化させる必要もある（Spence et al., 2001; Walczyk et al., 2009）。これらは認知的負荷を高める要因となる（Vrij, Granhag, & Poter, 2010; Walczyk et al., 2014）。さらに、嘘をつくことに対する動機づけが高いときは、統制過剰になり（DePaulo & Kirkendol, 1989; DePaulo et al., 1988）、認知的負荷が高くなるが、十分に準備した嘘を伝達するときは認知的負荷が低くなると考えられる（Sporer & Schwandt, 2006）。

ADCA理論は欺瞞の認知的側面に関する多くの知見に支持されている（e.g., Walczyk et al., 2003, 2009, 2016）ものの、理論と部分的に合致しない知見（Masip et al., 2016）も報告されている。また、ADCA理論は利害関係の高い深刻な嘘を対象に構築された理論であるが（Walczyk et al., 2014）、この4つのコンポーネントの仮定は、多くの嘘にも適用できると考えられ

る。したがって、日常生活でつく嘘においてもそれぞれのコンポーネントに対応する要素がみられるかを検討する必要がある。

本研究の目的

真実を話すときに比べて、嘘をつくときに内的過程である感情反応、覚醒、認知処理、および行動統制の試みは必ずしも強まるわけではないが、これらの内的過程の変動は、欺瞞の手がかりとなる行動表出に影響するだけでなく、嘘をつくか否かの意思決定と嘘をつくときに用いる方略に影響を与える可能性がある。たとえば、嘘をつくことを企図したときに嘘が露見する懸念を強く感じる人は、嘘をつくことを取りやめる、または嘘が露見したときに言い訳の利く「巧妙な嘘」（DePaulo et al., 1996）を用いるだろう。このことから、欺瞞時の内的過程を詳細に検討することは嘘をつくという行為全般の理解に役立つと考えられる。

先行研究では、内的過程について理論的な検討が行われてきたが（e.g., Walczyk et al., 2014; Zuckerman et al., 1981）、実際に嘘をつくときに、嘘をつく人が各理論で想定された内的過程を経験するか、また経験するとすれば、どのような人が、どのような状況で、どのような内的過程をどの程度経験するかを詳細に検討する必要がある。上記を検討するためには、嘘をつくときの内的過程を適切に測定できる心理尺度を作成する必要があるが、その前段階として、嘘をつく人が認識している内的過程と各理論との対応を確認する必要がある。

そこで、本研究では、大学生に嘘をつくときに経験する内的過程についての自由記述を求め、嘘をつく人が認識している内的過程を探索的に検討した。

方 法

調査対象者

大学生40名（男性18名、女性22名）が調査に参加した。調査対象者の平均年齢は21.3歳（ $SD = 1.0$ ）であった。

質問項目

調査対象者に対して、「あなたがついた嘘の中で、最も記憶に残っているものを一つ思い出してください。」と教示し、その嘘をついた時期を「（ ）前」（e.g., 1日前）の形式で記入させた。その際、DePaulo et al. (1996)、および村井（2000）に基づき、嘘とは「意図的に誰かをだまそうとする試み」であり、だます意図のある、冗談、誇張、謙遜は嘘に含まれる

が、だます意図のない、勘違い、皮肉は嘘に含まれないことを説明した。次に、その嘘をついたときに、感じたこと、考えたこと、嘘がばれないように試みたことをできるだけ多く記述するように求めた。なお、最も記憶に残る嘘について報告を求めたため、その中に社会的に不適切な行為が含まれる可能性があった。その場合、どのような嘘をついたかの記述を求めると、社会的に不適切な嘘を報告することを避けると予測された。そのため、嘘の内容については記述を求めなかった。最後に、調査対象者の性別と年齢の記入を求めた。

調査手続き

大学の講義終了後に、調査対象者に質問紙を配付した。調査の実施に際して、記入は無記名であること、調査への協力は任意であり、いつでも協力を取りやめることができること、回答は個人が特定されない形で処理され、研究の目的のみに利用されること、質問紙の提出をもって、研究参加に同意したとみなすことを説明した。なお、上記の調査手続きについて、明星大学研究倫理委員会による研究倫理審査を受け、承認を得た（申請番号 2022031）。

分類の手続き

調査対象者の各自由記述を分析対象となる要素に分割して集計したところ、平均で4.5個 ($SD = 2.2$) の要素がみられた²⁾。まず、内的過程または方略に関わる先行研究 (Hartwig et al., 2007; 畑山他, 1994; 織田他, 2015; Strömwall & Willén, 2011; Tabata & Vrij, 2023a; Vrij, 2008 太幡他監訳 2016; Vrij & Nahari, 2019; Walczyk et al., 2014; Zukerman et al., 1981) にもとづき、第一著者がこれらの要素を分類した。その際、サンプルサイズが小さいこと、調査の目的の1つが嘘をつくときの内的過程を測定する尺度の項目作成の参考資料にすることであったため、カテゴリに該当する記述を行った調査対象者が少ない場合にもそのカテゴリを維持した。これを初期の評定カテゴリとした。

次に、第一著者が各調査対象者の自由記述がこのカテゴリに該当するか否かを評定した。なお、調査対象

²⁾ 嘘をついたときに、「感じたこと」として記述された要素は平均 1.9 個 ($SD = 1.5$)、「考えたこと」として記述された要素は平均 1.4 個 ($SD = 0.8$)、「嘘がばれないように試みたこと」として記述された要素は平均 1.3 個 ($SD = 0.7$) であった。ただし、「感じたこと」に「考えたこと」である思考内容や方略が含まれるなど、想定した回答が得られないことがあったため、全体をまとめて分類した。

者の自由記述全体が各カテゴリに合致する内容を含むときは 1、含まないときには 0 として評定した。この評定とは別個に、心理学を専門とする研究協力者 1 名に各調査対象者の自由記述と評定カテゴリを呈示し、同様の評定を行わせた。調査対象者単位での評定者間一致率を算出したところ、各カテゴリの評定の一致率の平均値は 97.4% ($SD = 4.6$, $Range = 78.4-100.0$) であった。また、評定に偏りがある場合の一致率の指標である AC_1 (Gwet, 2008) は .72 から 1.00 の値を示した。評定の不一致については、第一著者と研究協力者の協議³⁾により解消し、最終的に各調査対象者の自由記述が評定カテゴリに該当するかを決定した。その際の協議により、新たに 4 つの下位カテゴリ⁴⁾と 9 つの上位カテゴリを追加で設け、それらのカテゴリに該当した調査対象者の人数と相対度数も算出した。

結果

40名の調査対象者のうち、1 名が他者を騙すための嘘をついた経験がない、2 名が嘘をついた経験を想起できなかったと回答したため、最終的に 37名の自由記述を分析に用いた。調査対象者が報告した嘘をついた時期は 14 時間前から 11 年前までであった。報告された嘘をついた時期を 7 段階に区分し、Table 1 にまとめた。調査対象者のうち 15 名 (40.5%) は 1 週間以内であると回答したが、10 名 (27.0%) は半年以上前であると回答した。

嘘をつくときに経験した感情反応、覚醒、認知処理

調査対象者の自由記述に表れた感情反応、覚醒、認知処理に関するカテゴリを Table 2 に示した。調査対象者が示した感情反応は「嘘をつくことに対する不快感情」、「嘘の露見への懸念」、「嘘に関連する快感情」の 3 つの上位カテゴリに大別された。調査対象者のうち、21 名 (56.8%) は「嘘をついたことに対する不快感情」である嘘をついた相手への罪悪感や、嘘をついたことに対する後悔、決まりの悪さなどについて言及した。2 名 (5.4%) が言及した「苦痛」もこのカテ

³⁾ 当初は「考えたこと」に方略が記述された場合、方略のみに該当すると評定していたが、「嘘の露見の回避方法」にも該当することにした。なお、「嘘がばれないように試みたこと」のみに方略が記述された場合、このカテゴリに該当するとは評定しなかった。

⁴⁾ 協議により「嘘をついたことに対する不快感情」の後悔と分類不能なものを別カテゴリにした。また「嘘の効用」は 1 つのカテゴリとして評定していたが、その後の協議で利益の獲得と不利益の回避に分けた。

Table 1 報告された嘘をついた時期 (N = 37)

時期	度数 (人)	相対度数 (%)
24時間中	6	16.2
～1週間	9	24.3
～1か月	7	18.9
～3か月	2	5.4
～6か月	1	2.7
～1年未満	1	2.7
1年以上前	9	24.3
特定不能	2	5.4

注) 範囲で回答した場合、記述された数値の下限と上限の平均値で分類した。また、数か月という回答、単位の表記がなかった回答は特定不能に分類した。

Table 2 嘘をつくときに経験した感情反応, 覚醒, および認知処理 (N = 37)

	度数 (人)	相対度数 (%)
嘘をつくことに対する不快感	21	56.8
罪悪感	12	32.4
申し訳なさ	10	27.0
後ろめたさ	1	2.7
後悔	1	2.7
決まりの悪さ	1	2.7
上記の混合	1	2.7
苦痛^a	2	5.4
嘘の露見への懸念	3	8.1
不安	2	5.4
心配	2	5.4
恐怖	1	2.7
覚醒	5	13.5
焦り	2	5.4
緊張	2	5.4
身体的覚醒	2	5.4
落ち着きのなさ	1	2.7
認知的努力	1	2.7
嘘に関連する快感情	4	10.8
安堵感	3	8.1
高揚感	1	2.7
嘘の影響の弱さ	4	10.8
平静さ	1	2.7
無感動・無感情	3	8.1

^a 苦痛は、嘘をつくことに対する不快感に限定されないため、独立したカテゴリにした。

ゴリに合致する不快感情に入る可能性もあるが、苦痛が嘘をついたことに対する罪悪感等に由来するとは限らないため、別個のカテゴリとして扱った⁵⁾。また、3名(8.1%)は「嘘の露見への懸念」である嘘が露見することについての不安、心配、恐怖について言及した。4名(10.8%)は「嘘に関連する快感情」である安堵感や高揚感について言及した。次に5名(13.5%)は「覚醒」として、緊張、焦り、身体的覚醒(e.g., 心拍数の増加)等について言及した。認知処理に関わる「認知的努力」(脳をフル回転させる)について言及したのは1名(2.7%)のみであった。その他に、4名(10.8%)は、平静さ、無感動・無感情の状態である「嘘による影響の弱さ」について言及した。

Table 3 嘘をつくときに経験した思考内容 (N = 37)

	度数 (人)	相対度数 (%)
嘘の効用・必要性	13	35.1
嘘の効用	9	24.3
: 利益の獲得	5	13.5
: 不利益の回避	4	10.8
嘘の必要性	6	16.2
嘘の露見に関する思考	26	70.3
嘘の露見の可能性	14	37.8
: 成功の見込み	5	13.5
: 失敗の見込み	9	24.3
嘘の露見による悪影響	9	24.3
嘘の露見の回避に対する動機づけ	6	16.2
嘘の露見の回避方法	7	18.9
嘘の露見後の対処方法	2	5.4
自分・他人の状態の推測	4	10.8
その他の分類不能な思考	4	10.8
何も考えていない	1	2.7

嘘をつくときに経験した思考内容

嘘をついたときに経験した思考内容を分類したところ、「嘘の効用・必要性」、「嘘の露見に関する思考」、「自分・他人の状態の推測」の3つの上位カテゴリに大別された(Table 3)。1つ目の上位カテゴリは「嘘の効用・必要性」であり、調査対象者のうち13名(35.1%)は、嘘の効用(利益の獲得・不利益の回避)とその必要性に関する思考について言及していた。2つ目の上位カテゴリは「嘘の露見に関する思考」であり、26名(70.3%)は、嘘の露見の可能性、嘘が露見

⁵⁾ 嘘が露見することに対して苦痛を感じる可能性もある。

することによって生じる悪影響、嘘の露見の回避に対する動機づけ、嘘の露見の回避方法、嘘の露見後の対象方法について言及していた。3つ目の上位カテゴリは「自分・他人の状態の推測」であり、調査対象者のうち4名（10.8%）が嘘の聞き手から見た自分の状態と相手の心理状態に関する推測（e.g., 自分の口調が普段と異なる、騙す相手は疑っているか）について言及していた。また、4名（10.8%）が上記のカテゴリには分類できない「その他の分類不能な思考」について言及した。

嘘をつくときに試みた方略

嘘をつくときに試みた方略を分類したところ、「非言語行動の統制」と「言語行動の統制」の2つの上位カテゴリに大別された（Table 4）。調査対象者のうち15名（40.5%）は「非言語行動の統制」として、視線、顔面表情、パラ言語、および上記に分類されない全体的な振る舞いを統制する方略について言及した。調査対象者のうち17名（45.9%）は「言語行動の統制」として、詳細情報の付与や制限、話題の回避、真実の挿

Table 4 嘘をつくときに試みた方略 (N = 37)

	度数 (人)	相対度数 (%)
非言語行動の統制	15	40.5
視線	3	8.1
顔面表情	7	18.9
: 表出	4	10.8
: 抑制	4	10.8
パラ言語	1	2.7
振る舞い ^a	10	27.0
言語行動の統制	17	45.9
詳細情報の付与	2	5.4
検証不可能な詳細の付与	1	2.7
詳細情報の制限	5	13.5
話題の回避	6	16.2
真実の挿入	4	10.8
話の整合性の維持	2	5.4
話のもっともらしさの維持	1	2.7
言行不一致の回避^b	4	10.8
分類不能な方略	3	8.1

^a 全般的な行動（e.g., いつも通りに行動する）もこのカテゴリに分類した。

^b 自分がついた嘘と矛盾しないように行動することを示す。

入、話の整合性の維持などの方略について言及した。また、詳細情報を付与する方略（2名、5.4%）より詳細情報を制限する方略（5名、13.5%）や、嘘に関する話題を避ける方略（6名、16.2%）が言及されることが多かった。さらに、話の整合性を保つために、話の中で矛盾が生じないように嘘を構成すること（2名、5.4%）を試みるだけでなく、嘘の発言を行った後に、“他の約束があると言って断った時間にその相手と遭遇しないように気をつける”などの言行不一致を避ける行動面の調整（4名、10.8%）も試みられていた。

考 察

本研究では、内的過程を測定する尺度を作成するための予備的調査として、大学生に嘘をつくときに経験する内的過程についての自由記述を求め、嘘をつく人が認識している内的過程を探索的に検討した。以下では、多要因理論（Zuckerman et al., 1981）とADCA理論（Walczyk et al., 2014）に準拠しながら、調査対象者の自由記述にみられた内的過程について考察する。

嘘をついたことによる感情反応として、半数以上の調査対象者は、罪悪感を主とする「嘘をついたことに対する不快感情」を報告した。また、報告した人数は少ないものの、「嘘の露見への懸念」や「嘘に関連する快感情」に関する記述がみられた。これらは、Ekman（1985 工藤訳編 1992）の指摘する「嘘にまつわる3つの感情」（嘘をついたことによる罪悪感、見破られるのではないという不安、うまく人を騙せたという喜び）に対応している。嘘をつくことによって経験した覚醒についての記述は、感情反応に比べて報告する調査対象者が少なかった。ただし、緊張等でカテゴリ化された覚醒は、恐怖や嫌悪と関連が強い（織田他, 2015）。そのため、嘘によって覚醒が生じたとしても、その覚醒が恐怖や不安などの感情反応としてラベリングされた可能性がある。また、嘘をつくときに生じる覚醒は感情反応に由来する可能性も指摘されている（Vrij, 2008 太幡他監訳 2016; Zuckerman et al., 1981）。そのため、調査参加者が覚醒の内的経験を感情反応と分けて報告することは難しかったのかもしれない。

嘘をつくときの認知処理として、認知的負荷、または認知的努力について言及した調査対象者は1名のみであった。この点については、日常生活でつく嘘の場合、認知的負荷は生じにくいという可能性が考えら

れる。日記法を用いた Vrij, Ennis et al. (2010) の調査では、嘘の半数以上は緊張や認知的負荷の評定が中点を下回るものであった。また、嘘をどのようにつくかによっても生じる認知的負荷は異なる (Walczyk et al., 2014)。14名 (37.8%) は、嘘をつくときに「真実の挿入」、「詳細情報の制限」、「嘘に関する話題の回避」、「検証不可能な詳細の付与」のいずれかの方略の使用を試みていた。真実を挿入する場合、もっともらしい話を作る必要はなく、矛盾を避けることもできるため、話の細部を記憶する必要はない (Vrij, 2008 太幡他監訳 2016)。また、詳細情報を制限すると認知的負荷は生じにくい (McCornack et al., 2014)。さらに、嘘に関する話題自体を避ければ、詳細情報を構成する必要もなくなる。加えて、調査対象者の中には、検証不可能な詳細情報の付与 (Vrij & Nahari, 2019) を試みたと言及した者が 1 名いた。嘘の聞き手が検証できない事柄について語るときは、事実との整合性を考慮する必要はなく、嘘の内容を構成するときの自由度は高くなる。そのため、これらの方略を用いた調査対象者は、認知的負荷を経験しなかったのかもしれない。認知的負荷や認知的努力が言及されなかった理由としてもう一つ考えられることは、調査対象者が生じた認知処理を上手く言語化することができなかったという可能性である。嘘をつくことによって生じた認知的負荷や認知的努力が、焦りや緊張という形で表現されたかもしれない。

調査対象者の自由記述には、ADCA 理論の決定コンポーネント (Walczyk et al., 2014) に関連する内容が多く含まれていた。決定コンポーネントでは、真実を話した場合と嘘をついた場合の相手の反応 (効用) と、それぞれの反応が起こる確率が心の理論によって推測される。調査対象者のうち、13名 (35.1%) は「嘘の効用・必要性」について、8 名 (21.6%) が「嘘の露見による悪影響」について言及し、14名 (37.8%) は「嘘の露見の可能性」について言及していた。真実を話したときの効用の期待値に関する記述はみられなかったものの、嘘を必要とする場合、真実を話すことに何らかの不都合があったと推測される。これらの点は ADCA 理論と合致している。ADCA 理論は、利害関係の高い深刻な嘘を想定して理論化されているが、本研究で得られた結果からは、ADCA 理論の決定コンポーネントについては、日常生活でつく嘘についても適用できる可能性があると示唆された。

また、調査対象者の記述には、嘘の露見を回避する動機づけの高さを示す記述、嘘の露見をどのように回

避するかについての思考、嘘が露見した後にどのような対処するかに関する思考、嘘の聞き手から見た自分の状態と相手の心理状態に関する推測についての記述もみられた。これらの要素は、ADCA 理論の構成コンポーネントと実行コンポーネントにおける認知処理に影響すると考えられる (Walczyk et al., 2014)。動機づけが強い場合、統制過剰となり (DePaulo & Kirkendol, 1989; DePaulo et al., 1988)、認知的負荷が高まる (Caso et al., 2005)。さらに、嘘によってその場を切り抜けるだけでなく、嘘が露見した後にどのような対処をするかを想定した上で嘘を構成するには、追加の認知的努力が必要となるだろう。さらに、自分がどのような行動を表出しているかをモニタリングし、嘘の相手がどのような反応を示しているかをモニタリングすることも認知的負荷を高めるだろう (Vrij, 2008 太幡他監訳 2016; Vrij, Granhag, & Porter, 2010)。

嘘をつくときの行動統制の試みとして、先述のように嘘の露見をどのように回避するかについての思考、嘘が露見した後にどのように対処するかに関する思考について記述がみられた。また、調査対象者のうち、非言語行動の統制の試みについて言及した者は 40.5% で、言語行動の統制の試みについて言及した者は 45.9% であった。両者について記述した者は 8.1% と少数であったため、日常生活において嘘をつく場合は、自分自身の非言語行動と言語行動のどちらにより注意を払うかについての偏りはなく、どちらが優先されるかは嘘をつく状況、または個人特性によって変動すると推測された。非言語行動については、視線や顔面表情について言及されることがや全般的行動 (e.g., 大胆に振る舞う) について言及されることが多く、特定の四肢・体幹の動きについての言及はなかった。言語行動については、前述のように、詳細情報を付与する方略についての言及より、制限する方略についての言及が多かった。詳細情報を制限する方略は、Tabata & Vrij (2023a) でも 23.5% の調査対象者に言及されていた。また、上記の結果は、詳細情報の制限に該当する「量の公準」の違反が最も頻度が高いという情報操作理論 2 の命題 (McCornack et al., 2014) とも合致する。さらに、これまでに報告がなされていない方略として、言行不一致を避けるといった、嘘をついた後の行動面の調整がみられた。自分がついた嘘と一貫するように行動し、矛盾する行動を避けるためには、誰に何を言ったかを記憶しておく必要があるが、このことは認知的負荷を高める要因になると考えられる (Vrij, 2008 太幡他監訳 2016; Vrij, Granhag, & Porter, 2010)。

また、記憶するだけでなく、そのことを必要なときに想起する必要がある。つまり、嘘を露見させないためには、展望的記憶を適切に機能させる必要があると言える。

本研究の限界点と今後の展望

本研究では、大学生に嘘をつくときに経験する内的過程についての自由記述を求め、多要因理論 (Zuckerman et al., 1981) と ADCA 理論 (Walczyk et al., 2014) に準拠しながら嘘をつく人が認識している内的過程について考察した。日常生活でついた嘘の場合、内的過程として感情反応が言及されることが多く、認知的負荷や認知的努力などの認知処理について言及されることは少なかった。一方、認知的負荷に影響しうな意思決定に関連する思考内容は言及されることが多かった。また、行動統制の試みとして、非言語行動と言語行動に対する統制が同程度の頻度で言及され、どちらの統制が優先されるかは嘘をつく状況や個人特性によって変動すると推測された。

本研究で得られた結果を解釈する際に、いくつかの注意点がある。第 1 に、本研究では想起させた嘘の種類や深刻さを特定していなかった。調査対象者には最も記憶に残っている嘘を想起させたが、日常生活でつかれる嘘の多くは内的過程の変動が小さいものが多く (DePaulo et al., 1996; Vrij, Ennis, et al., 2010)、本研究で報告された嘘の多くは深刻なものではなかった可能性がある。実際、調査参加者の 10% 程度は、嘘によって目立った内的過程が生じなかったことを窺わせる内容を記述していた。第 2 に、調査参加者の多くは、嘘をついてからかなり時間が経過した嘘について報告していた。そのため、実際に経験したこと以外の内容が報告に含まれた可能性がある。第 3 に、本研究では自由記述によって内的過程を検討しているため、調査対象者が意識化できたもののみが取り上げられている。そのため、意識化されやすい感情反応についての記述が多く、意識化されにくい覚醒や認知処理についての記述が少なかった可能性がある。第 4 に、本研究は予備的調査の位置付けで実施され、サンプルサイズが小さかった。そのため、特定の状況でのみ生じる内的過程を引き出すことができなかった可能性もある。第 5 に、本研究の調査対象者は日本人のみに限定されていた。Tabata & Vrij (2023b) では、低コンテキスト文化に属するイギリス人と高コンテキスト文化に属する日本人では嘘をつくときに用いられる言語的方略が異なっていた。そのため、低コンテキスト

文化では、本研究と異なる結果が得られる可能性もある。

以上のような限界点はあるものの、本研究では自由記述を通して、嘘をつく人が認識している内的過程と各理論との対応を確認することができた。次の段階として、本研究で得られた内容にもとづき、嘘をつくときの内的過程を適切に測定できる心理尺度を作成することが必要である。作成した心理尺度を用いることで、どのような状況においてどのような人が内的過程をどの程度経験するかを詳細に検討することができる。内的過程を詳細に検討することは、嘘をつくか否かの意思決定、嘘をつくときに用いる方略、さらには欺瞞の手がかりとなる行動表出の理解に貢献するだろう。

利益相反

本論文に関して、開示すべき利益相反事項はない。

引用文献

- Buller, D. B., & Burgoon, J. K. (1996). Interpersonal deception theory. *Communication Theory*, 6(3), 203-242. <https://doi.org/10.1111/j.1468-2885.1996.tb00127.x>
- Carson, T. L. (2022). Lying, deception, and related concepts: A conceptual map for ethics. In L. R. Horn (Ed.), *From lying to perjury: Linguistic and legal perspectives on lies and other falsehoods* (pp. 15-39). De Gruyter Mouton.
- Caso, L., Gnisci, A., Vrij, A., & Mann, S. (2005). Processes underlying deception: an empirical analysis of truth and lies when manipulating the stakes. *Journal of Investigative Psychology and Offender Profiling*, 2(3), 195-202. <https://doi.org/10.1002/jip.32>
- DePaulo, B. M. (1992). Nonverbal behavior and self-presentation. *Psychological Bulletin*, 111(2), 203-243. <https://doi.org/10.1037/0033-2909.111.2.203>
- DePaulo, B. M., Kashy, D. A., Kirkendol, S. E., Wyer, M. M., & Epstein, J. A. (1996). Lying in everyday life. *Journal of Personality and Social Psychology*, 70(5), 979-995. <https://doi.org/10.1037/0022-3514.70.5.979>
- DePaulo, B.M., & Kirkendol, S.E. (1989). The motivational impairment effect in the communication of deception. In J. Yuile (Ed.), *Credibility assessment* (pp. 51-70). Kluwer Academic Publishers.
- DePaulo, B. M., Kirkendol, S. E., Tang, J., & O'Brien, T.

- P. (1988). The motivational impairment effect in the communication of deception: Replications and extensions. *Journal of Nonverbal Behavior*, 12, 177-202. <https://doi.org/10.1007/BF00987487>
- DePaulo, B. M., Lindsay, J. J., Malone, B. E., Muhlenbruck, L., Charlton, K., & Cooper, H. (2003). Cues to deception. *Psychological Bulletin*, 129(1), 74-118. <https://doi.org/10.1037/0033-2909.129.1.74>
- Ekman, P. (1985). Telling lies: Clues to deceit in the marketplace, politics, and marriage. Norton.
- (エクマン, P. 工藤 力 (編訳) (1992). 暴かれる嘘——虚偽を見破る対人学—— 誠信書房)
- Grice, P. (1989). *Studies in the way of words*. Harvard University Press.
- Gwet, K. L. (2008). Computing inter-rater reliability and its variance in the presence of high agreement. *British Journal of Mathematical and Statistical Psychology*, 61(1), 29-48. <https://doi.org/10.1348/000711006X126600>
- Hartwig, M., Anders Granhag, P., & Strömwall, L. A. (2007). Guilty and innocent suspects' strategies during police interrogations. *Psychology, Crime & Law*, 13(2), 213-227. <https://doi.org/10.1080/10683160600750264>
- 畑山俊輝・Antonides, G.・松岡和生・丸山欣哉 (1994). アラウザルチェックリストから見た顔のマッサージの心理的緊張低減効果 応用心理学研究, 19, 11-19.
- Hopper, R., & Bell, R. A. (1984). Broadening the deception construct. *Quarterly Journal of Speech*, 70(3), 288-302. <https://doi.org/10.1080/00335638409383698>
- Lane, J. D., & Wegner, D. M. (1995). The cognitive consequences of secrecy. *Journal of Personality and Social Psychology*, 69(2), 237-253. <https://doi.org/10.1037/0022-3514.69.2.237>
- Levine, T. R. (2014). Truth-default theory (TDT) a theory of human deception and deception detection. *Journal of Language and Social Psychology*, 33(4), 378-392. <https://doi.org/10.1177/0261927X14535916>
- Levine, T. R. (2019). *Duped: Truth-default theory and the social science of lying and deception*. University of Alabama Press.
- Masip, J., Blandón-Gitlin, I., de la Riva, C., & Herrero, C. (2016). An empirical test of the decision to lie component of the Activation-Decision-Construction-Action Theory (ADCAT). *Acta Psychologica*, 169, 45-55. <https://doi.org/10.1016/j.actpsy.2016.05.004>
- Masip, P. J., Garrido, M. E., & Herrero A. M. C. (2004). Defining deception. *Anales de Psicología*, 20(1), 147-171. <https://revistas.um.es/analesps/article/view/27631>
- McCornack, S. A. (1992). Information manipulation theory. *Communications Monographs*, 59(1), 1-16. <https://doi.org/10.1080/03637759209376245>
- McCornack, S. A. (1997). The generation of deceptive messages: Laying the groundwork for a viable theory of interpersonal deception. In J. O. Greene (Ed.), *Message production: Advances in communication theory* (pp. 91-126). Lawrence Erlbaum Associates Publishers.
- McCornack, S. A., Morrison, K., Paik, J. E., Wisner, A. M., & Zhu, X. (2014). Information manipulation theory 2: A propositional theory of deceptive discourse production. *Journal of Language and Social Psychology*, 33(4), 348-377. <https://doi.org/10.1177/0261927X14534656>
- 村井潤一郎 (2000). 青年の日常生活における欺瞞性格心理学研究, 9(1), 56-57. https://doi.org/10.2132/jjpspp.9.1_56
- 織田弥生・高野ルリ子・阿部恒之・菊地賢一 (2015). 感情・覚醒チェックリストの作成と信頼性・妥当性の検討 心理学研究, 85(6), 579-589. <https://doi.org/10.4992/jjpsy.85.13231>
- Sai, L., Cheng, J., Shang, S., Fu, G., & Verschuere, B. (2023). Does deception involve more cognitive control than truth-telling? Meta-analyses of N2 and MFN ERP studies. *Psychophysiology*, e14333. <https://doi.org/10.1111/psyp.14333>
- 佐藤拓 (2010). 欺瞞を検知するための条件 太幡直也・佐藤拓 (企画), 太幡直也・佐藤拓・菊地史倫 (話題提供), 仁平義明・村井潤一郎 (指定討論) ワークショップ:「隠す」心理を科学する (1)——欺瞞的コミュニケーションの観点から—— 日本心理学会第 75 回大会 (豊中市)
- 佐藤拓 (2021). 欺瞞の手がかりと検出の正確性 太幡直也・佐藤拓・菊地史倫 (編)「隠す」心理を科学する——人の嘘から動物のあざむきまで—— (pp. 32-47) 北大路書房
- Spence, S. A., Farrow, T. F., Herford, A. E., Wilkinson, I. D., Zheng, Y., & Woodruff, P. W. (2001). Behavioural and functional anatomical correlates of deception in humans. *Neuroreport*, 12(13), 2849-2853. <https://doi.org/10.1097/00001756-200109170-00019>
- Sporer, S. L., & Schwandt, B. (2006). Paraverbal

- indicators of deception: A meta-analytic synthesis. *Applied Cognitive Psychology*, 20(4), 421-446. <https://doi.org/10.1002/acp.1190>
- Sporer, S. L., & Schwandt, B. (2007). Moderators of nonverbal indicators of deception: A meta-analytic synthesis. *Psychology, Public Policy, and Law*, 13(1), 1-34. <https://psycnet.apa.org/doi/10.1037/1076-8971.13.1.1>
- Strömwall, L. A., & Willén, R. M. (2011). Inside criminal minds: Offenders' strategies when lying. *Journal of Investigative Psychology and Offender Profiling*, 8(3), 271-281. <https://doi.org/10.1002/jip.148>
- Tabata, N., & Vrij, A. (2023a). The relationship between Japanese adults' age and self-reported verbal strategies when lying. *Frontiers in Psychology*, 13, 1075239. <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2022.1075239>
- Tabata, N., & Vrij, A. (2023b). Differences between Japanese and British participants in self-reported verbal strategies to appear convincing. *Psychiatry, Psychology and Law*, 30(2), 177-191. <https://doi.org/10.1080/13218719.2021.2003269>
- Vrij, A. (2008). Detecting lies and deceit: Pitfalls and opportunities (2nd ed.). John Wiley & Sons.
(ヴェイ, A. 太幡直也・佐藤拓・菊地史倫 (監訳) (2016). 嘘と欺瞞の心理学——対人関係から犯罪捜査まで: 虚偽検出に関する真実—— 福村出版)
- Vrij, A., Ennis, E., Farman, S., & Mann, S. (2010). People's perceptions of their truthful and deceptive interactions in daily life. *Open Access Journal of Forensic Psychology*, 2, 6-49. Retrieved January 11, 2024, from https://www.oajfp.com/_files/ugd/166e3f_fd5bd89611784449a73d44d0926416b0.pdf
- Vrij, A., Granhag, P. A., & Porter, S. (2010). Pitfalls and opportunities in nonverbal and verbal lie detection. *Psychological Science in the Public Interest*, 11(3), 89-121. <https://doi.org/10.1177/1529100610390861>
- Vrij, A., & Nahari, G. (2019). The verifiability approach. In J. J. Dickinson, N. S. Compo, R. Carol, B. L. Schwartz, & M. McCauley (Eds.), *Evidence-based investigative interviewing* (pp. 116-133). Routledge.
- Vrij, A., Semin, G. R., & Bull, R. (1996). Insight into behavior displayed during deception. *Human Communication Research*, 22(4), 544-562. <https://doi.org/10.1111/j.1468-2958.1996.tb00378.x>
- Walczyk, J. J., Harris, L. L., Duck, T. K., & Mulay, D. (2014). A social-cognitive framework for understanding serious lies: Activation-decision-construction-action theory. *New Ideas in Psychology*, 34, 22-36. <https://doi.org/10.1016/j.newideapsych.2014.03.001>
- Walczyk, J. J., Mahoney, K. T., Doverspike, D., & Griffith-Ross, D. A. (2009). Cognitive lie detection: Response time and consistency of answers as cues to deception. *Journal of Business and Psychology*, 24, 33-49. <https://doi.org/10.1007/s10869-009-9090-8>
- Walczyk, J. J., Roper, K. S., Seemann, E., & Humphrey, A. M. (2003). Cognitive mechanisms underlying lying to questions: Response time as a cue to deception. *Applied Cognitive Psychology*, 17(7), 755-774. <https://doi.org/10.1002/acp.914>
- Walczyk, J. J., Tcholakian, T., Newman, D. N., & Duck, T. (2016). Impromptu decisions to deceive. *Applied Cognitive Psychology*, 30(6), 934-945. <https://doi.org/10.1002/acp.3282>
- Zuckerman, M., DePaulo, B. M., & Rosenthal, R. (1981). Verbal and nonverbal communication of deception. In L. Berkowitz (Eds.), *Advances in experimental social psychology* (Vol. 14, pp. 1-59). Academic Press. [https://doi.org/10.1016/S0065-2601\(08\)60369-X](https://doi.org/10.1016/S0065-2601(08)60369-X)

Preliminary study of internal processes during lying

TAKU SATO (Department of Psychology, Meisei University)

NAOYA TABATA (Department of Policy Studies, Aichi Gakuin University)

MEISEI UNIVERSITY THE BULLETIN OF PSYCHOLOGICAL STUDIES, 2024, 42, 43—53

Key Words: lies, deception, internal processes.